

田町在住の伊藤末男様より戦争中のことで問い合わせがあり、この本が全国的に配布され、歴史の証言としての役割を果たしていることに感心して、深謝する次第です。

私達のこの証言こそが、次世代の人が良く理解して、世界平和と国家繁栄に寄与して下さることを確信して、制作担当の皆様方の健康と御多幸のもと、ますます発展的に推進していただくことをお祈りする次第です。

(熊本県 本田 正行)

シベリア抑留記

愛知県 杉浦 守 市

四十五区 (ソーロクベアチ 数字の四五)

作業が始まった時は二組と呼称されていた。程なく四十五区となり、昭和二十二(一九四七)年になって四十四区と変更された。ドイツの捕虜によって建築が

始まり、交代して日本人が造る建築現場であった。二階建てのブロック建築だ。職業別に大工、左官、電気工、建具職、鍛冶屋、石工、雑役等の職種が集まり、一五〇人くらいが作業をしている。一番多いときには三〇〇〜四〇〇人が作業をしていた。

六中隊はカーミン(石炭ガラとセメントを混合し圧縮して蒸気乾燥したもの)積みが主とした作業で、特に二小隊が担当していた。一小隊はトロッコでカーミン、木材等の運搬。二小隊は石工、左官等の補助としてカーミン・セメントを手元まで運び積みやすくする。三小隊はペント打ちと各種の雑作業。二中隊は大工、建具職で、六中隊が仕上げた外壁、間仕切り壁等の内装を家としてまとめ上げる。

そして一中隊の左官がカーミンの上塗りをする。五中隊は左官のセメント練り。三中隊は基礎工事、各所の整理等、土木雑工事が多かった。

カーミン積みの監督兼職人でトルコ人が直接の作業に関係した。

エフレム爺、セミニヒ、ダグラスコーク、アレキ

サンダー、バトラー等、年配の職人であった。白い山羊ひげが懐かしい。ブイストララー、ブイストララー（早くしろ、早くしろ）と追い立てられての作業だった。カーミン一個が十五か二十キログラムくらいあったと思う。背負いに二個乗せて架設の足場を一步二歩と踏みしめながら二階まで上がっていくつらさは、なんとも言えないつらい事であった。

セメントのモルタル作りも、湯でセメントを練るのだが、十二月の真冬の作業で、モルタル、カーミンと、素早く作業しないとモルタルが凍ってしまう。こんなことで密着するであろうかと心配する。地震でも起ればカーミンがバラバラになり崩れて落ちて建物は倒壊してしまふ。しかしシベリアには地震がないので、取り越し苦労でもあった。

トルコ人の監督も気立てはよい人であった。休憩には、マホルカ（刻みたばこ）の無心をする。度々もらった。ラジエータ（新聞紙）も度々分けてもらった。

復員するまでに二階建て二十四世帯のアパートが十

二棟完成した。共同住宅になるであろう。マガジン（販売所）もあり、二十二年には黒パンを買ったこともある。アパートには民間人が入居して来た。物々交換をした同胞もおった。隠し持っていた私物、または支給品のタバコと黒パンの交換もした。ループルで買うこともできた。

コテージ（アメリカンスキードーム）

二十一年三月ごろできた作業場で、現場は四十四区の現場と同じである。最初は小屋造りとして、我々が始めた作業場である。草の生えている土地で、測量、基礎コンクリをする。電柱を立てて架線する、水道施設も作る、鉄道敷設等の準備もする。本格的な一般住宅の建築であった。日本人が初めから段取りした作業場であった。

四十四区のカーミン積みが一段落してから始まり、夏季の間大工、左官等も張り切って作業したが、材料不足により、五軒完成、未完成三十軒くらいで中止された。

赤煉瓦工場

当初は三大隊（第一收容所ではない）の作業場であったが、二十年十二月ころより村上大隊の作業所となった。ザボイ（粘土現場）にて粘土を掘り、鋸屑と一緒に練り合わせて煉瓦を作る作業である。

地方人労働者と共にする作業である。大トロッコ、小トロッコ、切り換え、煉瓦の積み込み、石炭運搬、雑役等各種の仕事があった。朝鮮系の労働者が多かった。女性の労働者も多くなった。昼夜二交替制の労働である。日本人は夜間作業は少なかった。

昼勤務者は、窯より大トロ（大型運搬車）に積んである完成品の煉瓦を出して小トロ（小型運搬車）に積み替えて、屋外の所定の場所に集積する。窯内部の清掃、石炭ガラの処理、土煉機場に、粘土、鋸屑運搬。成型された煉瓦の屋外乾燥場への運搬等である。夜勤者は半乾燥の煉瓦を、小トロより大トロに積み替えて窯内に入れる。また焚き口への石炭等の運搬である。大トロの移動は困難な作業であった。作業場としては重労働の作業場であった。窯の近くでの作業で、冬は暖かかった。地方人が多いので、物々交換、ルーブル

にてパンを買うこともできた。ロシア婦人が多く働いており、ふっくらと飛び出た胸、アヒルのような尻、また人情味のある人柄で、浮気の話も時々出ていた。よく働く女性達であった。

白壁屯（カーミン工場）

石炭ガラをローラーで粉碎して、石灰、セメントを入れて混合し、エヤーで圧搾成型して煉瓦（ブロック）を作る。蒸気窯にて蒸気乾燥をする作業場である。

出来上がった製品は四十五区等の建築現場に貨車輸送する。窯は直径二・五メートルくらい、奥行き十五メートルくらいの円筒形の鉄製の窯である。底面には台車を入れるためにレールが設置してある。上部及び左右の両側より、蒸気が注入できるように設備されている。

一基に十三台の台車（一台に約六十個）が入る。約二十時間にて乾燥できる。

一日の設備能力が七百八十個である。窯は二基設置されていた。カーミンの大きさは厚さ二〇センチ、横

四〇センチ、縦三〇センチ、重さは十五〜二十キログラムくらいはあった。

窯より乾燥した製品を出して、所定の場所に積む。

終了後、成型した製品を窯内に入れる。その日の状況により、一〇〇%の製品化は無理であった。機械の故障により、作業ができないことも時々あった。

ガラ入れ・トロッコ搬入・搬出・積み込み・機械（エヤー）の作業に分かれている。監督は二人で、「赤っぼ（ガー公）」と「目玉」のあだ名がついていた。「赤っぼ」は赤い帽子でガーガーとよく小言を言う。我々の担当であり、良い監督であった。「目玉」は、大きい目をして、なかなか手ごわい監督であった。気に入らないと、円び（スコップ）の柄で殴りつけることもあった。五中隊一、二小隊交替制で、夕方六時より午前二時まで、午前二時より午前九時までの夜間作業が多かった。日勤も短期間であったが地方人が主であった。

鉄道作業

八時間作業、十二時間作業とあった。八時間制は特

技者の関係であった。一般は十二時間制で行われた。鉄道ダイヤの関係で、零下四十度以下になっても作業中止はない。貨車より石炭、木材、セメント、石灰、鉄材等の積み下ろしの作業である。

発電所、機関車工場、他の工場及び資材集積地が作業場所、三交替制の昼夜兼行の作業である。十二時間労働であり、所定時間内の作業のため、体力等級の一級の人が作業する。しかし時には二級、三級の人もすることがあり、重労働作業場であった。

燃料倉庫

主として発電所の石炭の積み下ろし作業である。引込線より貨車を燃料集積場まで人力で移動して石炭下ろしをする。空車となった貨車を人力移動して、石炭ガラを積み込む。石炭ガラが完全消火していなくて、貨車積み後発火したこともあった。発電所の石炭集積地の石炭が自然発火したこともあった。昼夜三交替の作業であり、昭和二十二年になってできた作業場である。

発電所の発電機、配電盤等の基礎コンクリ、煉瓦積

み、据付け、残土の運搬、窯作り、ボイラー磨き等の、各種雑仕事も多かった。

塗料工場

A・B・Cと三区に分かれていて、工場内の機械の設置、基礎工事の穴掘り、コンクリート作業等、雑仕事の現場であり、比較的軽作業で誰でも希望する作業場であった。

エニセイ製材

汽車に乗って一区東のエニセイ駅に到着。エニセイ部落にてエニセイ河で上流から運ばれて来た材木の陸揚げ、製材、製材した角材、板材、原木等の積み込みである。各グループ別にて、製材機械の補助（製材鋸を操作するのはロシア人である。指示により原木の移動の手伝い）、貨車より原木を下ろし、原木を台車にて製材場まで移動、製材した製品を貨車に積み込み、鋸屑及び製材不良品等の整理、貨車の移動、エニセイ河より原木の陸揚げ、その他雑仕事である。関連する作業であるので、重労働であった。全体のノルマ達成が大きな目標のため、協力し合っている作業である。鋸

屑整理が特に苦しかった。少しサボるとすぐ鋸屑が満杯になり、製材が遅れる。常に少ない状態に片づけることになっていた。

河よりの陸揚げ作業は特に良かった。指示された原木の量（ノルマ）を早く陸揚げすれば、その日は作業終了である。大体午後二時ごろには終了した。終了後の自由時間に近くのホルホーズより馬鈴薯をいただき自炊を四、五回した。小粒であったが美味しく、空腹を満たした。昼食にはスープが運搬されてくる。十二時間の作業の場合は、終了後もスープが支給された。一〇〇％達成で、給与も食事も一級であった。

大型電気鋸で、帯鋸が七、八条回転している。日本では見たこともなかった大型製材機械である。直径二メートルもある原木が一瞬の間に厚い板材となる。

エニセイ糧秣庫

エニセイ河に春が来て解氷する。下流に糧秣、日用品物資、工業資材等の船積み作業である。作業場へは自動車にての通勤で、昼夜の二交替制の作業であった。糧秣（食糧品関係）、日用品雑貨、工業用資材、

油類等、倉庫より出して、船への積み込みをする。下流へは列車での輸送ができないので、雪解けのエニセイ河での船輸送である。重労働作業のため増食される。パン、スープ、カーシャ（馬鈴薯）等多量の増食があり、食事関係は上の上である。

積み込むものが重量のため弱者には不適當な作業である。小麦粉六〇キログラム、砂糖九〇キロ、塩九〇キロであった。私には無理な作業であった。夏季には外輪の貨客船が上・下運航する。春先の解氷の時期に河の氷が割れて、トラックが沈みかけていることが二、三回あった。共謀して小麦粉一袋を盗み、ラーゲリに持ち帰ったこともあった。

食欲のため無謀なことができたものと驚嘆した。発見されれば帰国もできない強制労働の対象となる。

飛行場

一時的な作業で、民間飛行場にて燃料用のドラム缶の整理及び自動車への積み下ろし、外柵作り等で、作業時間が短いので、全員が希望した作業場である。

ドーツ（家具製造の手伝い）

家具製造工場の手伝いで、技術職以外の人は工場内の雑作業で、コンクリート作業、製材作業等、朝鮮系人と共同作業であった。後期になり技術者のみの作業で、雑作業は朝鮮系人がすることになった。

植林

四十五区の住宅地と工場地区の中間を緑地化する目的での植林作業で、潤葉樹の苗木を植樹した。また、街路や空き地等にも植樹した。短期間の作業場であった。

食堂

機関車工場の食堂の床のコンクリート作業で、短期間で終了した。

線路造り

ドーツ支線よりコテージまでの鉄道延長のための線路敷設作業で、短期間の作業場であった。

水道工事

水道の構築で五〇人くらいが作業した。五人一組になり穴掘り作業であった。ラーゲリ近くが多かったので、日曜日に営外使役として行われた。幅一メートル

ル、深さ三メートル、長さ三メートルを五人で十日間もかかった。短期間の作業であった。

ガレージ

建築物の基礎コンクリートより煉瓦を積み上げる作業で、左官、大工の雑役で、煉瓦運び、セメント練りとその運搬で、長期間続いた作業場であった。一時的に一部人員が各工場に分かれて機械作業したこともあった。

ヘルモテフ

カーミン積みの作業場で、素人で積み始めた作業で、大場組と言ひ記憶も新しい。白壁屯より、カーミン五〇個ずつ運搬する。一日一〇〇個を積むのがノルマであった。付近の油貯蔵庫より食用のあめを盗んできてなめた印象深い作業場である。

道路作業

二十年十二月より作業で、六中隊の専属の作業場であった。冬の作業で困難な仕事である。十人いて一日かかって五センチの深さも掘れない。寒さのため足踏みばかりして作業にならなかった。死者も多く出たよ

うであった。雪、氷を除き、凍った土を十字鍬や円びで掘削する道路作業で、冬期の一時的な作業であった。

コルホーズ（国営農場）

農場での作業で、氷の解ける五月ごろより始まる。耕馬により鋤鍬で畑を耕して、馬鈴薯の植え付け、キャベツ、大根、人参、ソバ、えん麦等の播種をする。植え付け、収穫の時期には五、六百人が作業した。植え付け後は五、六十人で草取り、中耕等の管理をする。また、地方人の盗難監視をする。収穫物はトラックで駅及び各ラーゲリに運搬する。多数の人が作業した。他のラーゲリからの応援もあった。コルホーズは開放的な作業場である。馬鈴薯の植え付けには、一カ所に五、六個に植えて早く終える。そして翌日来たときに掘り出して、ラーゲリに帰って食べる。

六月になると、アカザ、タンポポが生えてくる。ついで飯盒で茹でて食べ、空腹を満たしたこともあった（翌日の大便は濃緑便）。馬鈴薯の収穫時には共謀して、馬鈴薯をズボンの中に入れ足首は強く縛って、監

視兵に見つからないようラーゲリに運ぶ。地方人がコルホーズにパンと馬鈴薯の交換に来る。全員共犯者となり交換してやる。楽しい一日である。

機関車工事

機械の据付け、運搬、貨車への積み込み等の諸作業である。二交替制の作業もあつた。重労働の作業場である（現在は大型農機具工場となる）。

舎内作業

ラーゲリ内でする作業。特定の技術のある人を除き、弱者（練成兵）が作業する。パン工場、糧秣倉庫、舎内の改造等の軽作業である。

医務室

内科関係は休養日が少なく、外科の患者は休養が長く得られる傾向にあつた。内科では熱の有無によって休養日が左右される。ソ連女軍医は、外観が判断の対象になりやすいようである。頭が痛い、腹具合が悪い、しかし熱は平熱であれば療養はノーである。

健康度チェックは、裸になって尻の皮を引っ張って、筋肉の張り具合により、練成隊の対象の有無を判

断される。

医務室給食は、栄養を重要視され、一般より上質、高カロリーの食事であつた。上等肉・野菜・砂糖・油等、上質かつ多量の食事であつた。良い物を多く食べ、早く回復して、早く労働につくことを第一と考えたようであつた。

栄養失調にて衰弱死する人が出ると、必ず死体は解剖して病名が探究される。捕虜が死亡したことについての責任回避のための解剖であつたと思う。死者の衣服には何百匹かの虱がいる。取る力もなくなり、虱の犠牲となつたのである。

死亡当日は屍衛兵が立哨する。翌日墓地に埋葬する。全裸体で寝棺である。当初は棺のまま埋葬したが、年が明け二十一年になると、死者が増して、板材不足にて裸のまま土葬することになった。棺は墓地までの移動用となつた。

また、時によっては毛布、むしろを掛けて墓地へ行くこともあつた。死者の被服は滅菌場にて殺菌消毒して倉庫に納入する。代品として誰かが支給を受けるこ

となる。

一月のシベリアでは、埋葬は重労働作業である。埋葬のために穴を掘るにも、凍土状態で掘り下げることが困難である。五〇センチメートルくらい掘り下げて埋葬して、近くの雪を山盛りにし、墓標を建てて帰ったこともあった。春の雪解け時期には野犬に荒らされるのではないかと心配もしていたが、対策もなかった。

医務室の薬品と言えば、アスピリンか赤チンくらいしかなかった。生水を飲んだり、寒さのため腹具合を悪くし下痢をする人は、パンを真っ黒焦げに焼いて食べた。下痢止めの薬となり、すぐ回復した。黒パンが悪性の水分を吸収することが良いのではないかと思う。豚に消し炭を食べさせることと同じで、下痢止めには黒パンの黒焦げが効果一〇〇%で、多くの人が利用した。

二十一年春よりは病死する人はほとんどなくなった。

タイシエットから

バム鉄道建設に従事して

福井県 片山清次

前書き

我々タイシエット地区に配置された抑留者の作業は、ほとんどがタイシエットからブラーツクに至る間のバム鉄道の建設にかかわるものであった。以下、その間における私の体験を述べることにする。

昭和二十年～二十一年 タイシエット二六キロメー

トル 第五病院

洗濯場勤務

入院患者の下着、病衣、敷布、毛布類の洗濯作業を行う。一人一日当たりノルマ三三三枚（当該物品の大小を問わず、シャツでも毛布でも一枚として計算される）。